

わんにゃん通信

11月

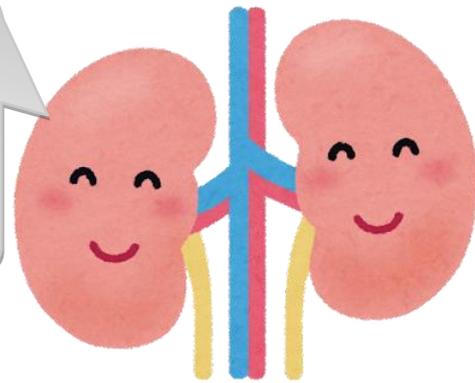
だんだんと寒くなってきました。10月はまだ暑い日があったので衣替えはまだ早いかなあとは思っていたのも束の間、冬物を急いで出しております・・・

今回は高齢のワンちゃん猫ちゃんに多い慢性腎臓病のお話です。



慢性腎臓病とは？

慢性腎臓病は、何らかの原因で腎臓の機能が長期間にわたって低下していく病気です。高齢の犬や猫に多く見られますが、若い子でも発症することがあります。徐々に進行していき、腎臓の機能の75%が障害されるまでは目立った症状は引き起こしません。そのため、慢性腎臓病がわかったときには、すでにかかなり進行した状態になってしまっていることが多いです。また、一度悪くなった腎機能は元に戻ることはありません。



慢性腎不全は4つのステージに分けられます

ステージ分類	残存腎機能	症状
ステージ1	33%	なし
ステージ2	25%	多飲多尿
ステージ3	<10%	元気消失、嘔吐、食欲不振、脱水
ステージ4	<5%	治療なしでは生命維持が困難

症状が顕著に出始めるのでこのステージで飼い主さんが気づき、来院されることが多いです

治療は？

一度悪くなった腎機能は元に戻ることはありません。そのため、**いかに進行を遅らせるかが治療になります**。初期の慢性腎臓病では、食事療法が最も重要な治療となります。また、水分補給も重要ですので、「**いつでも新鮮な飲み水を飲める環境**」を整えてあげることも大事なことです。慢性腎臓病が進み脱水が起こってくると、強制的に体に水分を補給する必要がでてきます。

食事療法

タンパク質、リン、ナトリウムを制限した慢性腎臓病用の療法食がおすすめです。ドライフードからウェットフードまで色んなメーカーからたくさんの種類のもので好みのものを探しましょう。



嘔吐がなければ、**自分で口から水をたくさん飲むように工夫してあげます**。普通の水をなかなか飲んでくれない時には、鶏肉や魚などを煮出し、脂を取り除いて作ったスープや、野菜を煮出して作ったスープ、缶詰やドライフードを少量加えて溶かした状態の水などを飲んでくれることもあります。また、**ドライフードよりもウェットフードの方が、水分摂取量が増加するので、嗜好性の高い腎臓病用の流動食などや、ドライフードを水でふやかすことでも飲水量を増やすことができます**。



皮下に針を刺し、輸液剤を投与する皮下輸液は比較的短時間、通院で行います。投与部位が一時的にラクダのこぶのように腫れますが、時間とともに吸収されていきます。静脈に留置針を固定し、直接静脈に投与する静脈輸液は、少量ずつしか投与できないため、**必要量を十分に投与するためには、長時間かかります**。入院が必要になりますが、体の状態に合わせて必要な輸液量を調節しながら直接血管に投与できます。ただし、**重度の脱水や心不全などで循環の状態が悪い場合には皮下に投与した輸液剤が効果的に吸収されませんので、静脈輸液の方が適しています**。

恵子先生からのコラム

慢性腎臓病は高齢の猫ちゃんでも1番よくみられる病気です
○なんとなく水をよく飲む（やたら水飲み場にいるなあ）、
○食欲にむらが出てきた（最近ご飯に飽きたのかしら？）、
○食べてはいるが体重が減ってきた（年のせいかな？）
○皮膚の張りが無くなってきた（これも年のせい？）

昔だったら多分そんな感じで、病院に行くこともなく、老衰だったねという感じになっていたと思いますが、今は早目の健康診断で早期発見できたら、進行を遅らせることもできるようになっていますので、中高齢になったら、まず年に1回は、血液検査、尿検査などの健康診断をお勧めします。